
罪深く悩み多き我等

悠羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪深く悩み多き我等

【著者名】

IZUMI

【作者名】

悠羽

【あらすじ】

銀時と土方。

短(?)編集

B-Lであります。

夢で逢えたら（前書き）

受け攻めは固定していません。

作者のノコリテンションによつ~~は~~設定変わります。

夢で逢えたら

・夢で逢えたら

原作設定

もう付きました

「何がそんなに気に入らねえってんだこのクソ天パあーふざけんな
つー俺はもう帰るからなー」

「ああ帰れ帰れ！清々すらりあーコマコマアー」

そう言ってケンカしたのは今日の毎下がり。

きっかけは些細な事だったのに、そこは素直じゃない二人の事。

売り言葉に買ひ言葉でとうとう十方は帰ってしまった。

そんな今日のやつ取りを思い出しながら

「けどよお…、何もホントに帰る事無いじゃん

土方君よお

と呴いても差し込む夕日に吸い込まれて。

ソフアで「口口」寝返りを打ちながら考える事は土方の事ばかり。

ああダメだ。こんななんじや何かダメだ。

「ま、過ぎた事はしあがないつてか」

まるで自分に言い聞かせるように口に出し、俺は万事屋を後にした。

「あー、ちよつと飲み過ぎたんじやねえの？」

万事屋を後にした俺は一人で飲みに出掛けたのだが、飲んでも飲んでも考えるのは土方の事ばかり。

千鳥足で家路を辿る間に考えるのもやつぱり土方の事。

…やっぱ今日は俺が悪かったよなあ…

きつかけはホント些細な事。

たまたま街で見掛けた土方君が、沖田君の頭を撫でていただけ。

柔らかい笑顔で。

まあ土方からしたら沖田君は弟みたいなもんなんだろうけど…

あんな顔見れんのは俺だけだと思ってたんだけどな…

そしてその後万事屋に顔を出した土方に理由も言わばハツ撃たりして…

うん、やっぱ俺だわ。悪いの。

でも謝るのはなあ…

何て考えてながら階段を昇ると

「こやあ

玄関の前に

黒い塊がいた。

何だ」つやと近づいて良く良く見てみると

「ここやあ」

真っ黒い子猫だった。

「何？お前俺に飼われたいの？ダメダメ。ウチには育ち盛りの犬と小娘がいるんだから」

そう言いながら玄関を開けると

「ここ

俺の足元をすり抜けて家の中へ入つていつてしまつた。

「ちよっともうダメって言つてんじやん」

なんて言いながら子猫を抱き抱えないと

真っ黒で艶々の毛並、シャープな体つき、刃色の瞳

…なんか土方みたい。

一度そう思つてしまつたらもう土方にしか見えず。

しかも二つの間にか土方の定位置にさよにんと座つてゐる。

「……土方……？」

「こりゃあ

「……んな訳やねえよなあ」

あ～、俺相当酔つてるわ。

頭をがしがし搔いて風呂の準備に向かつた。

風呂の湯が溜まる間に子猫にミルクをやつてみた。

「つまいかあ？」

子猫はチラリと此方を見て、またミルクを舐めている。

その様を眺めていると自然に頬が緩む。

可愛いなあ、おい。

今日は神楽も定春も居ねえし、

「しゃあねえから一晩泊めてやるよ」

「ちよ、『ララ暴れんなつて!』

折角だから洗つてやるつと一緒に風呂に入つたはいいのだが

「ぶにやああ!」

やつぱり水は嫌いなのか震えるし逃げ回るし。

「お前洗わせねえと一緒に布団入れてやんねえぞおお!」

堪り兼ねて怒鳴つたら急に大人しくなりやがつた。

その隙に体を洗つてやり、一緒に湯船に浸かる。

「 もうだ、一晩とまこゝれお前にお詫び付けてやるよ」

「へん、タメ、ロロ？ 黒いからクロ？ もれともタマ？」

「……………」

「……………？」

恐る恐る呼んでみる。

「……………？」

普段は恥ずかしくて呼べなご名前を付けていた。

「……………」

「あ、や！」

「……………」

「あ、や！」

「……………」

「……………」

トシは首を傾げて俺を見ている。

「アイツは、土方はまだ怒ってるかな？」

「土方…今日は俺が悪かったよ。」

「…」

「な、んて、お前に言つてもしゃあないか」

と俺はトシと風呂を出た。

と、上がるぞ

風呂から上がり、トシをドライヤーで乾かしていくと、

「あ、」

そうだ

急に思い付いて机の引き出しを開けた。

中から取り出したのは、鈴。

下のババアが温泉行つた時の土産のキー ホルダーだ。

「トシ、じつとこいつよ」

その鈴を紺色のリボンに通し、首に説んでやる。

「おお、お前似合ひじゃん」

頭を撫でてやると、喉を「ロロロロロ」と鳴らし擦り寄ってきた。

「アイツもお前みたいに素直だったらあー。まあ素直じゃねえのはお互い様なんだがよ。」

「」やあ

「何て言つか…俺ばつか好きなんじゃないかって、土方にとつて俺は別に特別でも何でもなくて…何て考えたりとか、しちゃう訳よ。」

「」？

「やっぱ俺、相当土方が好きなんだろつなあ。まあ絶対本人には言えねえけど。」

トシの頭を撫でながら苦笑い。

「あ～あ、アイツもトシって呼んでみてえよ。んでもって銀時、なんて呼ばれてえよ。」

ま、無理な話だろつがな。

「ホントは俺ももつと素直になりてえんだよ」

ホント、こいつの間にこんなに惚れ直ったんだわ。

「…苦しこよ。好きなんだよ…」

何時から俺はこんな女々しくなったんだわ。

「全部お前のせいだからな…土方…」

「ここやあ」

土方にもこんな風に言えたらいいの。

トシが土方だつたらいいの。

「も、寝ようか」

どんどん切なくなってきた俺は、トシを抱き締めて布団に入った

夢を見た。

トシが土方の声で喋っていた。

俺の頬を舐めながら銀時、銀時つて何度も。

それはとても優しい声で。

舐める度に首の鈴がチリンと鳴って、舌がくすぐったくて、そしてとても嬉しかった。

「トシ…」

「お前えりモタモタしてんじゃねえつー」

「裏だー！裏へ回り込めー！」

窓から聞こえる物騒な声に目を開けると、外はもう明るかった。

「桂ああー今日！」それは逃がさねえぞー。」

よろじと起き上がり窓から覗けば、黒い集団が捕物帖を繰り広げていた。

そして先頭で指揮をとる愛しい人。

頬杖をついて暫く眺めて、はつと気が付いた。

「せうだ、トシは？」

「トシ…」

布団を捲つても、ソファの上にも何処にも居なかつた。

あつと空いていた窓から出て行つてしまつたのだろう。

「ま、元々一晩の約束だしな」

一抹の寂しさを振り払う様に言い、もう一度布団へ潜り込んだ。

ジリリーン…ジリリーン…

次に目を開けるともう夕方だった。

無理矢理体を起こし、受話器を取る。

「はーい、万事屋銀ちゃんでーす」

『今日アネゴがすき焼き食べに連れてくつてゆーから今夜も帰らな
いネ』

それだけ言つと切れてしまった。

「そりかあ…今夜も一人かあ」

また飲みに行くかなあ。

なんて受話器を持ったままぼんやり考えていると

「なんだ、今日はチャイナは居ないのか」

急に後ろから声がして

「つ！」

慌てて振り返ると

「チャイナの癖に気が利いてるじゃねえか

玄関に寄り掛かり、ニヤリと笑う土方が。

「土方…」

びっくりして言葉が続かない俺に、土方はこう言った。

「ああ？ 土方あ？ トシって呼べよ。… 昨夜みてえこよ」

な、銀時

何時もより少し優しく笑う土方の刀には、紺色のリボンで結ばれた鈴が光っていた。

ある朝の会話

-ある朝の会話-

「ねえ、」

まだ薄暗い朝方の安宿。

「ああ？」

布団の中の俺は、見慣れた隊服に袖を通す土方に声を掛けた。

支度する手は止めず、土方はチラリと此方を見た。

「ねえ、俺達つてジー ゆーカンケイ?」

「は? 何言つてんだ? てめえ」

慣れた手付きでスカーフを巻きながら返される。

だけど俺は更に聞いてみる。

「カラダだけ？爛れたオトナのカンケイ？」

土方は黙々と支度を続いている。

何となくカラダを重ねる様になつて早半年。

週に3日の時もあれば2週間連絡無しの事もある。

その間、付き合いつとか、そんな話になつた事はない。

ただ逢つて、抱いて抱かれるだけ。

「ただの性欲処理？」

更に俺は続ける。

だつてこれ以上はもう無理。

気付いちやつたんだよ、自分の気持ちに。

「それとも體つぶし?」

「じゃあアレだ。何かの鬱ゲームとか?」

ヤバイ

自分で言つてゐ癪に泣きたうだ。

泣いてるなんてバレたくないて俯いていると、

「バカかテメーは」

ため息混じりの声がした。

「だよねー。何の意味も無い事なのにねー」

少し震える声で答えて、それでも顔を上げられずにいる俺に土方は告げた。

「…何でその中に』俺がテメーを好きだから』つて選択肢がねーん
だよ」

好き？誰が？誰を？

えええつ？

ハツとして顔を上げると、土方は準備を終え出ていく所だった。

「今夜、行くから予定開けとけ」

そう言って出ていく土方の頬は少し赤かった。

その後ろ姿を暫く眺めて、またもそもそと布団に潜り、漸く俺は理解した。

『ひょっとして… いれって吉田ってヤツか…？』

マジで？

期待しちゃつよ？

あー、銀色のヤナギもつてナビも！

そして俺はいそと万事屋へ戻り、土方の為にマヨネーズ料理を作りうかなんて考えるのだった。

- 路地裏の悲劇 -

がさり…

身を隠している植木が思いの外大きな音を立て、心臓がどきりと鳴る。

気付かれたのではないかと標的を見れば、

「あら、パーソンじゃない」

見た事無いようなモンスターに話し掛けられていた。

しかしあけにアゴが特化したモンスターだ。

危険か？

斬るか？

そう迷つてこるつつか、とにかく、標的は一瞬一瞬モンスターと会話を交わしながら歩き出した。

俺は植木から素早く抜け出し、建物の影から影へ身を隠しながら標的を追つた。

静かに、気配を殺しながら影から影へ。

『これじゃ鬼の副長じやねえか』

心の中で呟き、舌打ちする。

ちなみにこれは偵察の仕事ではない。

んなもんは山崎にやらせつやあい。

『ああ、何でこんな事になつてんだ』

今朝の巡回の途中、前から歩いてる来たアイツを見付けた。

今日一矢は想こを吐げる。

そんな覚悟で屯所を出ていた俺は咄嗟に建物の影へ隠れた。

通りすがりを路地裏へ引き込んで告げようとしたのだ。

しかし俺も気が動転していたのだろう。

気が付くと、アイツは通り過ぎていた。

しまったと思い、何とかチャンスを窺いながら後を付け始め、今に至る訳だ。

『しかしホントうひうひのフヨフヨしゃがってあの天パ』

想い人であるにも関わらず悪態をつく。

『一体何の目的で何処へ向かってんだ。ってか誰だその男…ヤケに親しげじゃねえかあ！あつ、肩なんか組みやがって！俺の銀時から離れろやこのマダオがああ！』

叩つ斬つてやる…

そう思い、刀に手を掛け路地裏から飛び出せうとしたら

ドンッ

何かにぶつかった。

低い姿勢で飛び出した為か、田の前に見えるのは黒いブーツ。

徐々に視線を上げていくと。

白い着流し。

腰に木刀。

この辺から背中をイヤな汗が伝い出した。

片腕を抜いただらしない着こなし。

紅い瞳。

ふわふわの銀色。

「何人の後コソコソ付けてんだ。ストーカーですかコノヤロー」

みつ、見付かつたアア！

「あー…いや、その、これはだな」

チクショウ、上手い言い訳が見付かんねえ。

「やっぱストーカーの部下はストーカーですかあ？」

「てめつ、俺を近藤^{アコト}と一緒にすんなああ！」

いや、待てよ十四郎。

これは逆にチャンスじゃないか？

廻りには誰も居ない路地裏。目の前には想い人。

今だ！言つんだ俺！

「あー、俺はただ、お前によお…」

何？という感じで首を傾げ俺を見る銀時。
そんな顔すんな可愛いじやねえかあ！

「お前に、よ…」

顔が熱くなるのが解る。

やべえ、何て言やあいいんだ。

何も上手い言葉が見付かんねえ。

銀時は腕を組んで、俺の次の言葉を待つてゐる。

「その、だな……」

あああ、頭の中が真っ白だ。

何でこんな窮地に立たされてんだ。

敵前逃亡は士道不覚悟だと解つてている。

だが……だが言えねえ。

たつた一言でいいの。

「つ、何でもねえ」

言つが早いが俺は走り出していた。

「え？ おーい大串くーん？」

銀時の声が聞こえたが俺の思考回路はもう限界突破。

「今日の事はぜってえ忘れりよおおーーの糖尿天バがああーー」

チクショウツー！ こんなはずじゃなかつたのにー。

叫びながら、泣きながら、俺はひたすら逃げた。

おまけ

走り去る土方を俺は暫く眺めていた。

「…何だつてんだ」

頭をぼりぼり搔いて、またふらりふらりと万事屋へ戻る。

アイツが今日言おうとしたことは大体予想は付いてる。

そんなの、毎日アイツを見てたら解る。

ふとした仕草で、田線で。

「ホント、変なところで臆病なんだよなあ、アイツ」

言えぱいいのー。

俺はせつてえ断らなーからよ。

スノードーム（前書き）

-スノードーム-

スノードーム

やく…やく…やく…

俺はただ、歩いていた。

一面真っ白な世界を。

前を歩く男の白いブラウスが雪に溶け込む。

しかしその手は俺の手をしっかりと握り、

背中は吹き荒ぶ雪にかき消されそつで。

「どうか、このまま…」

小さな咳せき届く事無く、俺は肩に掛けられた隊服を強く握った。

昨夜新ハガ万事屋へ電話を掛けてきた。

『銀さん、神楽ちゃんが…』

定春と雪遊びで山へ行つたまま帰らない、と。

『雪も強くなつてきてるし、またか何処かで道に迷つているんじや

…』

俺は万事屋を飛び出した。

やべ…やべ…やべ…

前を歩く男が此方を見ずに言つた。

「寒くねーか?」

「…………うん」

お前の方が寒いだろ、なんて言えなくて。

・神楽を探しに出た俺は案の定迷つてしまい、山の洞窟でしゃがみ込んでいた。

「…………寒い…」

感覚の無くなつた指先を吐く息で暖める。

外は一寸先も見えない程の吹雪。

思い出すのは想い人の事ばかりで。

ああ俺、此處で死ぬのかなんて冷静に考えた。

愛煙家で、マヨラーで、口の悪い、でも優しいアイツ。

伝えられなかつた想いは涙に変わり

「…ひ、じかた…」

こんな事なら伝えておけばよかつた、と少し後悔し

俺はゆつくり目を閉じた。

「もつすぐ麓だから

その声にまつとして前を見る。

少し此方を向いている顔は、優しく微笑んでいて

「…うん」

俺は俯いて、繋いだ指に力を込めた。

…すや、…万事屋！

遠くから声が聴こえる。

「万事屋……銀時！」

ああ、これはアイツの声だ…

じゃあ今、肩を揺さぶつている手もアイツなのかな。

だつたらしいな…。

まだはつきりしない意識の中でそんな事を思つ。

「銀時…しつかりしろ…」

一層激しく揺ゆかされ、はつと我に帰った。

まだ重い瞼を開けると

「銀つ……良かつた……」

震える声で強く抱き締められた。

「ひじ……かた……？」

小さくその名を呼べば抱き締める腕に力が入る。

「ひじかた……」

その腕が、声が、体温が、土方の想いを伝えてくるよう

切なくなり、また少し泣いた。

やく……やく……やく……

「なあ」

土方の歩みが、少しだけ遅くなる。

「もしも、」のまま…」

口籠る土方。

その先は聞かなくて解る。

だつて俺も同じ気持ちだから。

だけど…

「それは出来ねえよ」

もしも、このまま一人で居られたら

そんな願いを叶えるには、俺達は守る物が増えすぎた。

常に争いに身を置く土方にとつて俺の気持ちは足枷でしか無く、そのままのせいで命を落とすかも知れない。

やつ思ひと気持ちを伝えるのは躊躇われ、

そしてきっと、土方も同じ事を思つていてる。

解つてゐる。

だけど、だけど

「ださーーー、やつらしだけーーー」

目を伏せ、深く指を絡ませると、

「ああ…」

より強く握られ。

そこから土方の想いが流れ込んできて

胸が苦しくなつた。

「…ん…やあ…」

「銀さん！」

「トシ一！」

遠くから声がする。

そしてだんだん近くなる。

俺達は顔を見合わせ微笑み合い

静かに、決意を込めて指をほだいた。

暗い夜道と恋の華

- 暗い夜道と恋の華 -

夜も更けて来た頃、

此処は真選組屯所副長室。

目の前には大量の書類。

俺は事務的に判子を押しながら時計を見た。

午後8：57

そろそろだな。

俺はコートを羽織り、副長室を後にした。

「 せうひ 」

吐く息が白い。

出所の門を出て、何時もの道を行く。

『 まるで逢い引きだな 』

心の中で呟いて

・逢い引き、

その響きが満更じやない自分に驚いてみたり。

気を抜くと直ぐに緩んでしまつ頬を引き締め、何時もの曲がり角を
曲がる。

そして田に飛び込んで來るのは、明るい自動販売機の明かりと、

寒さに耐む男。

「 よね 」

「 ああ 」

決して約束してこぬ訳では無一。

「 何、お前また煙草買いに来たの? 」

俺はたまたま通り掛かっちゃつてや。

そつぱりしたが、ロイシは毎日此処へ来てこる。

そして俺も。

「 お前は毎日通り掛かっちゃつんだな 」

少しからかづ様に言ふ

「 懸こかよ 」

やつぱり顔を反らすロイシの鼻は少し赤くて。

やつぱり顔を反らすロイシの鼻は少し赤くて。
やつぱり顔を反らすロイシの鼻は少し赤くて。

「この寒空の下、俺を待っていたのか。

改めてそう実感し

『可愛いな』

何て思つてしまい。

思わず赤くなつた指先を掴んだ。

「ひやつー。」

そんな声すら可愛く思え、指先を包んで暖めてやる。

「あ、あの…土方?」

困つたように上目遣いで俺を見る顔は見る見る赤く染まり。

「あの、もう大丈夫だから」

それでも俺は暖めて続ける。

「ね、土方…」

懇願される様に潤んだ瞳で見つめられ、俺はそつと指先を離した。

漸く指先を解放されたコイシは、それでもまだ暫く俺を潤んだ瞳で見つめ

「じゃ、俺もう行へから…」

そつと血中を向け、歩き出した。

俺は可だか名残惜しくなつてしまい

「なあ、」

声を掛けるとピタッと止まる血中。

「明日もまた、たまたま通り掛かってくれねえか？」

そんな事を口走る俺に、アイツは見た事無い位赤い顔で小さく

「おっ、たまたまならな

と返し、また歩き出した。

俺は暫くその背中を眺め

「早く愚田にならねえかな……」

ひつやうと膝を、夜空を見上げた。

黒い欲、白い慈悲

- 密と蜜 -

ぬるい裏入ります

今日はほつてない。

仕事でミスし、財布を落とし、総吾のバズーカは直撃だ。

人生が思い通りにいくとは思つて無い。

『だが一つ位、思い通りになることが有つても良いんじやないか?』

そう思い、自分の下で乱れる男を見る。

「はあつ…あつ、んつ…ひじかたあ…」

綺麗な銀糸、妖しく光る紅い瞳、乱された着物から覗く白い肌。

その細い腰はねだる様に揺れている。

「何だ、まだ足りないのか?…相変わらずヤラシイな…」

そつ耳元で囁けば涙を溢し恥じらつて、俺の浅ましい欲が刺激される。

「ならば姫のお望み通りに……」

今までよりも深く貫けば

「ひつ、んつ……あつ、やつひじ……つんあつ、は、げしづつ……」

しなやかに膣中を反りせんべ。

「んつ、んあつ……あよつ、……ふあつ……なん、か……はげしづつ……」

潤んだ瞳で此方を見る様はとても淫らで、美しい。

「マイツは、俺のもんだ

その一心で腰を打ち付け、中を掻き回す。

「んんあつ……やつ……だ、めえつ……」

じじんとばかりに腰の律動を早めると、限界を訴える悲鳴にも似た声が。

・「マイシのこんな姿、誰にも見せたくないねえ

「……っ…あんっ、このまま…ヤリ殺しても…っ、いい、か…？」

思わず口をついて出た言葉に、自分で驚いた。

腰の律動はそのままに、銀時の反応を伺う。

紅い瞳はゆっくり動き、俺を見据え、いつの間にか

「……んっ、十方がつ、あつ、やつ、…したいな…っあ、い…よ…
？」

…殺して…？

少し微笑んで俺を見る様は慈悲深い女神の様。

その言葉は俺の征服欲を満たすには十分で

「へへ…あんっ…」

「あ…あん…ひじ…つ、かたあ…！」

俺はすがり付くように、銀時は包み込む様に抱き締め合ひ

「んっ……ふあっ、あ……あああっ……！」

「くっ……、はあっ……、くうっ……！」

貪るように歯を求める

「はあっ……ひじかたっ、ひじかたあああ……っ！」

「う、うん……ぎこ……っ！」

互にの音を浮かび合しながら、その後も繰り返し愛し合へ、

俺の黒い欲は解き放たれ、銀時の足を白く汚していた。

妄想 炸裂

- 妄想炸裂 -

…ん？何か良い匂いがする…

トントン

ジュー・ジュー

台所からだ。

今日は新八は休みだし、神楽は間違つても料理なんかしない。

じゃあ一体誰だ？

半分寝て、半分起きている頭でそんな事を考える。

チラリ時計を見れば朝の7時。

『誰だ？おーでも良こ四こだなあ……』

「銀つー・ギー・んつ、おー・ギー・ーー。」

俺はあのまめ一度寝てしまつたひつこ。

誰かが俺を起しつづく。

「の瓶…

んへーの瓶せつこー。

「うあーー、あさつてが足りんわーあ

「わあー、あさつてが足りんわーあ

そうだった。

俺達、夫婦になつたんだつた。

つてゆーことは

十四郎は

俺の…

「俺の嫁万歳つ！」

ガバッと飛び起き、抱き付いてそのままの勢いで押し倒す。

「やんつ、銀つてば…だめつ」

「だつて十四郎可愛いんだもん」

何時もとは違う淡い水色の着流し、

ピンクのフコフコHプロン

何時もよりテレ度の高い甘えた声色。

これらを兼ね備えた十四郎は

無敵つつ！

「だからダメっぽ。お味噌汁冷めちゃうよ。」

なあああにいい？

十四郎の手料理だとおつ？

俺の為につ？

そんな…そんな事されたら…

「萌え——つづ——」

俺が叫ぶと、下の階から物音が。

そして玄関が勢い良く開いた。

「へんなせええつーー」と夜の蝶は今から休むんだよー静かにおし
つーー」

「うわせえまばあつー」ひとりまだ新婚はやなんだよつー！」

怒鳴り込んで来た下のばばあを追い返し、俺は十四郎の手料理が並ぶ食卓に付いた。

「「いただきまーす」」

ご飯にお味噌汁、焼魚に玉子焼き。

何とも理想的な朝食。

ひたすらもべもべと食べっこると

「美味しい？」

不安気に首を傾げて聞いてくるマイワイヤ。

「ウマイよ、どれも

「良かつたあ」

安心したように笑うマイワイヤを見て

『いや、ホントはお前の方を頂きたいんですけど』

などと考えたが口には出れない。

食後にゆっくり頂く事に決めているから。

「「「JR新潟駅でございました」」

食べ終わると十四郎は食器を片付けだす。

台所に立つフリフリエプロン装備の十四郎に、俺の妄想は膨らむばかり。

今日は絶対エプロンプレイっ！』

アヘンに固く誓つてゐると

さん？

いつの間にか片付け終えた十四郎が田の前に立つ。

うーん、やつぱ可愛い。

「あ、お布団片付けなきゃ」

寝室へ消えていく十四郎。

あ、今から美味しく頂くんだからお布団片付けられたら困るじゃん。

やつ細っこ、立ち上がりつつあると

「ああ……」

寝室からうわく呼ぶ声が。

何事かと思つて、襖を開けると

「ああ……」

何とこいつだ。

十四郎が布団の上に艶かしく座り、潤んだ瞳で俺を見ている。

「さあと……、夜まで待てなさい……」

良く見れば何時の間にやら裸エプロン。

『句の不可避す、なんですかどうも……』

俺は全ての神に感謝し、恭しく手を合掌した。

「いただきまー

……つて夢を見ました』

「うせええ！そして長えええ！」

朝から珍しく電話を掛けてきたかと思えば

「この腐れ糖尿天パがああ！ いつぺん死んでこいや！」

長々と語りやがつてコンチクショウ。

『あーあ、夢の十四郎はあんなに可愛かつたのになあ』

「だから俺を勝手に夢に出すな！」

『甘えた声でしゃべつてた』

あークソつ、本氣でムカついてきた。

『素直で可愛いかつたなあ』

ブチンッ

自分で中で何かが切れた。

「そんなの夢が良かつたんなら、ホントに俺を嫁にしゃがれクルクル天パがあつ！」

おまけ

その日の夜、

漸く仕事を終えて部屋には戻ると

「十四郎、結婚して下さい」

婚姻届と指輪を持つて正装した銀時が待っていた。

- 哀と愛 -

解つてたんだ。

何時かこんな日が来る事。

「……結婚、する事になつた」

土方は俺の顔を見ずに、告げた。

「……うん」

解つてたんだ。

でも覚悟は出来て無かつたみたい。

俺、今普通の顔出来てんのかな。

「…止めないのか?」

ああ止めたい。出来る事なら。

でも

「お前ももつ良い歳だしな。丁度良かつたんじゃね？」

出来ないんだ。

「はつ。お前にとつてはそんなモンだったのか」

俺だけ本気になつてバカみてーだ

自嘲氣味に言い捨てる土方。

俺は何も言えなくて。

…胸が、痛い。

壊れそつだよ。

…そのまま土方は出ていった。

あれから土方から電話も来ない。

街でも会わない。

もちろん万事屋にも来ない。

土方はあいつと俺の事嫌いになつただろうつな。

「良かつたんだよ…」これで

でも俺は好きまだ。

「やつは…結構苦しいな」

愛する人の来ない部屋で、鳴らない電話を見詰めて呟いた。

「銀さん聞きました? 土方さん結婚するらしいですよ」

ある日、買い物から帰ってきた新ハが言った。

「へえー、そう。まああんなマヨリージや奥さん苦労するだひつな

窓の外を見ながら、何時もの氣だるい口調で言つ。

「そして僕らも招待したいって、土方さんが」

にこやかに言う新ハの手には、残酷にも3人分の招待状。

月日が流れるのは早いもので、今日は土方の結婚式当日。

行きたくない

つて言つたら子供みたいだらうか。

でも俺が行つても行かなくても、アイツは結婚してしまう。

そう仕向けたのは俺。

「おつ、今起きるから

行けば、俺の恋は終わるだらうか。

行けば、少しは楽になれるだらうか。

そんな事を考えながら、俺は出掛ける準備を始めた。

『それでは新郎新婦の入場です』

豪華な大きい扉が開き、ゆっくりと歩いてくる一いつの影。沸き起こる拍手。

『ココリに至りては泣き出す始末。

一見、幸せそうな二人。

だけど気付いてしまった。

ほんの一瞬だけ、土方が泣きそつた顔で俺を見た事に。

それでも式はつつがなく進み、残すはケーキカットのみ。

『それでは、新郎新婦共にお色直しの為一旦退席致します』

「あー、俺ちよつとトイレ

俺は席を立つた。

「ちょっと、すみません困ります」

「や、ちょっと新郎と話したいだけだから」

「でも……」

「ほんのちょっとだけだから」

俺が来たのは新郎控室。

何とか係りの人を言ごめぬめでドアを開けると

「やあ……じゃ……」

田を見開いて驚く土方が。

「折角の晴れの日なのにそんなシケたツラしてんじゃねーよ」

何? そんなに銀さんの事好きだったの?

言ひ終わらない内に、

土方に抱き締められた。

「銀、俺と一緒に逃げてくれ」

すがり付く様に俺を抱き締める土方。

ああ、土方はまだ俺の事好きで居てくれたんだ。

嬉しいなあ。

もう泣き止んだよ。

でも

「何バカな事言つてんだ

「ぎこち…」

土方の田の涙が溜まる。

「お前は、結婚しなくちゃならねえ」

解つてんだろう？

子供に言い聞かせる様に背中を撫でながら囁つ。

真選組副長として、真選組を護る者として。

お前は、大事な物を護らなきやならねえ。

その隣に俺が居ちゃいけないんだ。

俺の決意の固さが伝わったのか、もう土方は泣き言を言わなかつた。

「じゃ、銀さん飲み過ぎちゃつたんでもう帰るわ

そう言い、泣きそうな顔を見られたくなくて背中を向けると

「ぎこ…」

頬を両手で挟まれ

口付けされた。

「もう、最後だから。でも、今も本気で愛してる。お前が望むなら俺はこの思いを背負つて生きていぐ」

別の場所で

そう言った土方の声は震えていた。

俺は土方の手をゆっくり離し、告げた。

「お前はもう十分色んなモノを背負つてゐる。そんな気持ちまで背負うこりたあねえ」

土方が俯く。

「その代わり、お前のその気持ちまで俺が背負つて生きていぐ

土方がはつと顔を上げたその時

「へへへん…

「準備はお済みですか？」

二人ともドアを見る。

「もう時間切れみたいだな」

「銀…」

「お前の事を…俺はずつと見てるから、お前はお前の大変なモノ、立派に護り通せ」

土方は暫く俺を見詰め、

小さく頷くと背中を向け歩き出し部屋を出て行つた。

一度も振り返らずに。

「これで良いんだ。

共に生きられないと知りながら、俺達は想い合つて生きていく。

それはとても苦しく、しかし甘美な事で。

まだ土方の温もりが残る頬に触れ、小さく呟いた。

「土方、どうか…幸せに」

・イブ イブ イブ2011・

バカップルの会話のみ

「なあ、銀時… 今日見廻り中に気付いたんだが今週末つて、アレだよな」

「……アレ？」

「アレだよ、アレ」

「何かあつたつけ？」

「ちょ、お前アレ解んねえの？ 今町中その話題だぜ？」

「だーかーらー、アレって何だつづーの」

「本気で言つてんのか？ 成る程… お前位のバカ天パになるとアレも解んねえのか」

「ちょ、それは聞き捨てならねえぞおー天パは今関係ねえだろ？ が！バカマヨ侍がああ！」

「おまえがあんまりにも解んねえからだろ？ が！」

「お前が回りくどいからだろ？ が！ 僕だつてちゃんと言葉にして誘

われてえんだよバカ！」

「おまつ、解つてたんじやねえか！」

「あーでもアレってなんだろうなあ～？ちやんと言つてくれないと
銀さん解んな～い」

「くつ……、今度の土日はクリスマスだから2日共予定開けとけ年中
ピータローがああ～！夕方迎えに来るからめかし込んで待つていろや
あああ～！」

「あークソやつぱ嬉しいじやねえかバカヤロー！土方大好きい！」

「可愛ごこと言つんじやねえ！俺も好きだあ～！」

重い 想い

- 重い 想い -

「あれ？ 大串くんじやん」

夕暮れ時、市内見廻り中に声を掛けられた。

俺の事をそんな風に呼ぶのは一人だけ。

万事屋主人 坂田銀時

「あれ？ 聞こえなかつたのかな？ おーぐしくーん！」

「うるせええ！ 俺は大串じやねえつづてんだろー！」

何時もと同じやり取り。

「イツにとつては何でも無い事なんだろうが、

「そんな怒んなくともいいじゃん。」 ロチンぱつか攝取し過ぎじゃねえの？」

俺にひとつは特別なやり取り。

「お前みたいに糖分ばっか摂取してるヤツから言われたかねえよ」

俺は、このふらふらした銀髪ヤローが好きだ。

「じゃ、お仕事頑張ってねー」

手を振りながら去つて行くアイツを見ながら、煙草に火を付ける。

好きだなんて、絶対言えない。

俺は臆病だから、今の生温い関係で満足だ。

だけどこの感情は日に日に大きくなり、どんどん重くなつてきやがる。

こんな感情、燃えちまえばいい。

かぶき町を紅く染める夕日の中。

病は氣から

- 病は氣から -

「銀時……お前は俺の心に咲く一輪の花だ……」

「ひじかたあ……好き。ホントに好きい」

もう夜だというのに明かりも付けず、薄暗い万事屋で甘い言葉を紡ぎ合つ二人。

足を絡ませ、指を絡ませ、視線も絡ませている

土方十四郎と坂田銀時。

その二人である。

良く見れば二人共妙に顔が赤い。

鼻も垂れている。

でもそんな事はお構い無しだ。

「ねえ土方あ。ちゅうしてえ？」

「まつたく…可愛い子猫ちやんだな」

付けたままのテレビだけが一人を淡く照らしていた。

『…現在江戸を中心には猛威を奮つてゐる謎の病気は蔓延する一方です。微熱、鼻水といった一見風邪の様な症状ですが、自分の思い、考へてゐる事を洗いざらい話してしまうという特徴があります。現在治療法は確立しておらず、自然治癒を待つしかないようです…』

そして二人はテレビを消し、絡まり合つたまま布団へ潜り込んだ。

次の日も一人の愛は止まらなかつた。

「なあ、銀時」

「ん？ なあに土方あ」

「俺と…結婚してくれないか？」

鼻を垂らしたままのプロポーズ。

しかし銀時はホント一向に構わないよ、ついで

「うれしごー！土方愛してりうー！」

涙を溜めて抱き付いた。

「じゃあ、行つてくるから」

「うそ、氣を付けてね」

「ペンポン鳴つたりしても絶対に出たらダメだからな。ちがうと締まりじつお利口にしててくれよ、ハニー」

「うそ、行つてらっしゃい、ダークン」

たかが役場へ行くだけなのだが。

「行つてらつしゃい～」

銀時はずっと手を振つていた。

暫くして土方が戻つて來た。

「お帰りなさい～寂しかつたよお」

「じめんな、銀時」

などと会話をしながらキスの嵐。

「でも、ほら」

土方が懐から取り出したのは婚姻届。

「土方あ、俺達、夫婦になるんだね」

「ああ、世界一幸せにしてやるからな

そして一人はペンを取つた。

数分後、書き終えた一人は感動に浸っていた。

「これ、出したら夫婦なんだね」

「おう、出したらお前は俺の嫁だ」

何だかバカ丸出しの会話であるが、当の本人達は至つて真面目なのだ。

「ね、すぐに出しに行く?」

「いや、こーゆーのは大安吉曰が良いんだ」

「わあ、土方物知りだねえ」

そして二人は書いた婚姻届を枕元に置き、今日も絡まり合いながら布団へ潜り込んだ。

翌日、先に起きたのは土方だった。

そしてふと気付き

「…なんだ？これ

枕元の婚姻届を手に取り、絶句した。

「ぎ、ぎ、銀時いい！起きる！起きてくれ！」

隣で寝ている銀時を揺さぶり起こす。

「もう～何なの土方。まだ銀さん眠いんですけどお

「これ！これを見ろ！」

銀時の目の前に婚姻届を突き出す。

「はああ？婚姻届え？誰と誰の

「バカかお前は…お前を良く見ろ！」

そこに書かれているのは

土方十四郎（印）

坂田銀時（印）

「はああ！？まじでかああ……つてかちよつと待て。俺等ここ数日、何してた？」

「何つて……つわああー思い出したあー何してたつてゆーかナーバッカしてたじやねえかああ」

「どうやら病氣が治つてしまつたらしく。」

もひるんとの間の記憶は、有る。

「土方、お前甘い声で甘い言葉囁くちやつたりしてたよなあ

「バカか。それはお前もだよー。」

「つてか一人共…」

「「きめええええーー！」」

二人の叫び声は見事にハモり、まだ早朝のかぶき町に響き渡つたのであつた。

-後日談-

「」はかぶき町役場。

二人の男が窓口へ訪れていた。

「あの……すみません。今のところこの国では男女間の結婚しか認められてなくて……」

「「ですよねー」」

酒と泪と男と男

・酒と泪と男と男

「何だあ？もう飲めねえってのかあ？」

「いじは何時もの居酒屋。

一人で飲んでたら、急にやつて来て隣を陣取ったコイツ。

「あー…銀さん今日は一人で飲みたい気分なんですか？」

やんわりと断つてみたが

「ああ？」

一睨みされて

「イイ工何でもあつません

敢えなく玉砕。

グラスを口に運びながら、チラリと隣を見遣る。

土方十四郎

俺の、好きなヤツ。

諦めようと思つてた。

だって俺みたいなオッサンから好かれても、土方が困るだろっから。

だけどこんな事されたら諦め切れない。

無駄な期待はさせないでくれよ。

そう思いながらも俺の目は土方を見てしまつ。

一体此処は何軒目だろっ。

もうかなり酔つてるようだが。

「つてかそんなんでまだ飲めんのかあ？」

何時もの調子で話しあげると

「ああ？俺はまだまだイケるぜ？」

そう言って一気にビールを飲み干した。

そして

「俺はよう、ただお前が一人寂しく飲んでるのが見えたから…気に
なっただけだ」

それだけだかんな

ちょっと照れた様にそっぽ向いていう土方。

やつぱり前言撤回。

俺を期待させたお前が悪いんだからな。

とにかく好きでいてやるから、

覚悟しとけよ？

イブ 2011

・イブ 2011 -

イブ イブ イブ2011の続き。

今日はクリスマスイブ。

土方は約束の時間になつても来なかつた。

机の上に足を投げ出し、ジャンプを読みながら待つた。

窓の外は見ない。

心底待つてゐみたいで悔しいから。

時計がくるくる回る。

一時間…一時間…

土方はまだ来ない。

『仕事で何かあつたのかな…』

じゃあもつ今日は来ないかもね。

しゃーねえな。

「アイツは副長様だもんなあ」

年中暇人な俺とは違うんだよ。

「一人で飲みに行くか」

言つてみても、動く気にはむづむづなれなくて。

「…電話くりい出来るだらうがよ」

鳴らない電話

土方は

「…よつこいらせ

俺は意を決し立ち上がりマフラーを手に取ると、浮かれた町へ出掛けた。

町はバカみたいに人が溢れていて、何だか一人は俺だけみたいに思えてきて。

俺は手早く用事を済ませ、逃げる様に万事屋へ戻つて行つた。

万事屋の玄関を開ける。

『ひょっとしたら来てるかもしね』

俺の甘い期待はすぐに裏切られた。

だれも居ない部屋。

窓から無遠慮に入り込むイルミネーションの明かりが部屋を照らしていた。

「ま、解ってたんだけどね

だけどね、土方。

早く来てよ。

俺、待ってるんだよ。

早く、来て。

俺は泣きそうな気持ひを押さえながら、さつき買つてきた袋を開けた。

ケーキ、チキン、大量の甘味、マヨネーズ、そして酒。

テーブルの上に並べ、暫く無言で眺めていた。

もつこんな時間だから、どこかへ飲みに行くのもしんどいし。

でもちゅうと置こうがちやつた。

やつぱ土方が来てくれないと困るよ。

余つぢぢやうじぢやん。

チツチツ

時計の音が耳に付く。

あと少しで、日付が変わる。

そしたらもう、約束の日じゃなくなる。

あと五分

四分

三分

ガラツ

突然玄関の開く音が。

「やあやつ」

すっかり油断してたから変な声が出た。

こんな時間に来るのは、アイツしか居ない。

「つたぐ、 こんな時間にどちら様ですか」「ノホヤロー」

不機嫌剥き出しで声を掛けると

「待つてたのか？」

走つて来たのだろう。

隊服のまま、息を切らせた土方が一ニヤリと笑う。

「別に待つてねーし」

パイツと顔を反らして言えば、土方が少し笑った。

何だか恥ずかしくなつてきた俺は、

「ま、上がればいいじゃん」

土方を招き入れた。

テーブルの上の料理を見て、

「これ……」

「あー、飲みに行くのもキツイだらうから、今日は此処でパーティ

ーだ

土方に囁つと

「ありがとう、銀時」

「めんな? 遅くなつて

なんて頭を撫でられると、押さえ込んでた寂しさが溢れてきて。

泣きそうな顔は見られたくないから、土方に抱き付いて

「……バカ」

胸に顔を埋めて呟く。

土方はすっと頭を撫でてくれていた。

「でも、来てくれて嬉しいよ」

こんな日だから少し素直になつて見たけど、やっぱ恥ずかしいや。

俺はもつと強くしがみつき、土方の匂いを胸一杯吸い込む。

時計の日付はもう変わっていた。

MerryXmas

夕暮れマジック

-夕暮れマジック -

超短文です。

暮れも押し迫ったある日の夕方。

珍しく仕事が早めに終わった土方は、急に思い付いて万事屋へ来て
いた。

ピンポンも鳴らさず玄関を開け、

「ただいまー」

土方としてはほんの冗談のつもりだったのだが、

「おかえりー」

と、当たり前のよつて返されて。

毎日いろんな風に暮らしたいなんて思つてしまつて、

「へつー…めごつー…俺と結婚してくれー！」

なんて、思わず口走ってしまう。

そんな、不思議な夕暮れマジック。

奥の奥まで

・奥の奥まで・

チャリン

万事屋に響く金属音。

「あ、やべつ」

急に銀時が声を上げた。

「どうした?」

「いや、棚の裏にバイクの鍵落としちゃった

銀時は棚の裏に手を差し込み、取り戻しと試みるが

「ダメだ。ギリ届かねえ」

取れなかつたらしい。

「 しょうがねえなあ。 退いてみろ」

しぶとく粘つてゐる銀時を退かし、俺が手を突つ込んでみる。

「 くうつ、微妙に届かねえ」

その時

「 土方、もつと奥までつ」

棚の上から除き込んでいた銀時の声。

その言葉に、力一杯伸ばしてた腕を思わず緩めてしまつ。

「 違うう、もつと奥の方つ」

…… いろんな事でいろんな事考えるなんて、自分でも気がつかないといけ

思つが

「…銀時、やつれのもう一回言つてくれないか？」

頼んで見ると

「もうと奥の方まで？」

普通に言つてくれる銀時。

『何だこの妙なエロさはあああーヤバイ俺の妄想がヤバイ!』

目一杯腕を伸ばしながら、そして伸びそうになつてゐる違つ部分を必死に押さえながら心の中で叫ぶ土方であった。

イブ2011その後

・イブ2011その後 -

12／25深夜

「もうすぐ終わっちゃうな

俺は惜しむ様に窓の外を眺めながら呟つ。

窓の外では何処の店もクリスマスツリーを片付け、いそいそと門松を出している。

「つてか、クリスマス終わったから速攻正月モードって…皆切り替
え早えなあ」

後ろのソファから土方が言つ。

「でもさあ、楽しい事はいっぱいあるやつがこいじさん

振り向かず、窓の外を見たまま言つと、

「まあ確かに……お前といつやつて過いせらるなら、悪くねえな

そんな言葉と共に腕が伸びてきて。

まだ片付けてないツリーの明かりの中で抱き締め、抱き締められながら窓の外を暫く眺めていた。

悩みの種

- 悩みの種 -

土方十四郎は、最近悩みがある。

どうにも解らないのだ。

自分の感情、という物が。

何かが気になるのだ。

でもそれが何か解らない。

イライラもやもや考へてみると、決まってあの天バが出てきて邪魔
しゃがむ。

そつこねば常に頭の片隅にアイツが居る気がする。

ホント一体何なんだアイツ。

腕を組み、頭を悩ませながら見廻りしている

「あ、大串くんだ」

悩みの種が現れた。

「大串じゃねえつつてんだろ」

不機嫌剥き出しで返せば

「わあ、大串くんこわーい」

などと返されて。

頭の中でも現実でも俺の邪魔して、ホントこいつ何なんだ。
ムカつきついでに頭を叩いてやると

「ひどーい」

なんて抜かしやがった。

その反応が面白くて、再度頭を叩く。

「もー、ホント何なの?」

頭を押さえて睨んでくるアイツを見て

「あ、」

解つた。

解つちました。

俺は愛されたいんだ。

このふざけた天パに。

頭を擦りながら

「ホントにマジで何なんだ」

何て言いながら去っていくアイツに

俺だけ見て欲しくて。

だから何時も喧嘩腰で、突っかかり

少しでも俺の事を考えて欲しくて。

「……なる程だな」

そして俺は妙にすつきりとした顔で、また見廻りを続けるのだった。

赤い糸

- 赤い糸 -

「ねえ、赤い糸って知ってる?」

小指を眺めながら、土方に問い合わせる。

土方は少し訝しげな顔をして、

「運命の人と結ばれてるってヤツだろ?」

下らねえ

と、返してきた。

俺はまだ小指を見詰めながら

「やっぱ土方も知らない女と繋がってんのかな?」

呟くと

「まあ、お前もだらうがな」

と返されて。

「じゅあわ」

此方を向く土方。

「俺の糸、切るから」

だから

「土方のと、繋げてくれない?」

田を見開く土方。

そして少し赤くなり

「…勝手にしろ」

と小指を差し出してきた。

俺は赤いペンを持ち出して、土方の小指と俺の小指に赤い印を描く。

わづくつ

丁寧に。

お願ひだ神様

今だけでもいい。

ホントに繋がりますよつこ。

願いを込めて

同じ印の付いた小指を絡め、祈った。

深夜、自室にて

・深夜、自室にて・

草木も眠る丑三つ時。

土方十四郎は屯所の自室で不意に丑を覚ました。

誰か来る。

静かに枕元の愛刀へと手を伸ばし、警戒する。

『こんな時間に侵入して来るたあ… ただ者じやあねえな』

何時でも斬り掛かるように布団の中で体制を整えた。

やつれつと近づいて来る気配。

そしてそれは俺の部屋の前で止まつた。

『狙いは…俺か』

刀を握る手に力が籠る。

中の気配を伺っているのか、なかなか襖は開かない。

俺は襖を睨み続けた。

暫しの沈黙。

そして

聞こえたのは意外な声だった。

「土方…起きてる?」

か細い声が。

銀時?

動搖して刀身がかちゅりと音を立てた。

「起きてるの?」

音も無く襖が開く。

其処には、愛しい恋人の姿が。

「銀時…どうしたんだ」

驚いて声を掛ける俺に

「夜這いに来ちゃった」

何時も通りなおどけた口調。

しかし

「銀時…？」

その瞳は赤く、瞼は少し腫れぼつた。

泣いていたのか？

銀時は裸を閉め、俺の布団に潜り込んできた。

「「めんねえ、どうしても逢いたくなつちやつて

やべるから、ちよじただだから

やつひつひ俺の胸に顔を押し付ける。

「やつひつたさだっ？」

「…」

返事をせず更に強く抱き付いて来る。

俺は小さく溜め息をつき、柔らかな銀髪を撫でながら話し掛けた。

「まあ、聞かれて話すような素直なヤシジやねえよなあ、お前は

腕の中の銀時がひくつと身動きする。

「でもな…」

やつひつひと銀時の頭を撫でながら

「俺に逢いたくなつたら、何時でも来い」

俺が言つと、銀時ははつと顔を上げ、また胸に潜り込んだ。

「……ありがと、土方」

そう呟いた耳は真っ赤で。

抱き締めている身体はとても小さく思え、

優しく、大事に包み込んだ。

聞こえていた少し震えた呼吸が寝息に変わる頃、もつ外は白み始めた。

もう、行かなくては。

「おやすみ、銀時」

安らかな顔で眠る頬に口付けを落とし、隊服を抱え部屋を後にした。

優しい男

・優しい男・

「土方やーん、団子屋寄つてきやせんかい？もちろん土方さんの奢りで」

今日は総吾と市内見廻り。

マイシはなせつきからいの調子だ。

「あ、」

「だから団子屋は寄りねえつひとつてんだらうが！」

総吾が言つより早く怒鳴ると

「旦那じゃないですかい！」

手を振る総吾。

その視線の先には

坂田銀時

俺の、恋人。

ぞきりと心臓が跳ねた。

「あれ？ 沖田くんじゅん。 大串くんも」

へらつと笑い、此方へ近づいて来る。

「旦那あ、何してんですかい？」

「んー、ちゅうと依頼でね」

そう言いながらちゅうと俺を見る銀時。

『やばつ…』

熱くなる頬を隠したくて思わず手を反らしてしまった。

すれば

「あ、大串くん肩に何か付いてるよ」

俺に手を伸ばしてきて

「ひー」

耳を掠めて肩に触れできやがった。

『～つー』イシガワザとつ

コイツは俺の弱い場所を知ってる。

睨み付けると、ニヤツと笑い

「あれ？背中の方に落ちちゃったかな？」

次は俺の両肩に手を掛け、背中を覗き込んできやがった。

「てめつー何ーー」

これはさすがに抵抗の声を上げる。

そんな事はお構い無しに肩を持ち、身体を密着させてくる銀時。

そして

「今日も可愛いよ、十四郎

熱い吐息と共に囁き込まれて。

熱くなる顔。

もう押されれない。

拳を握り、俯いていると

「あれ～？ 田那ヤケに土方さんには優しいじゃないですか～」

からかう様な総吾の声に羞恥が増して。

「そりゃあ大串くんは可愛いからねえ

当たり前の様に答える銀時。

「まあ土方さんはからかい甲斐がありますからね～」

そんな事を話ながら団子屋へ消えて行く一人。

その背中を見遣り

「ホント、優しくねえ」

そう呟いて、

煙草に火を付け、まだ吸まらない心臓を抱えて一人で見廻りを続けるのであった。

好きだ 好きだ 好きだ

-好きだ 好きだ 好きだ -

「土方、好き。ちょー好き。もひびひしあやつたのってぐらい好き

銀時はさつきからこの調子だ。

大晦日の万事屋。

今日の仕事は夕方から初詣の警備だ。

一緒に年を越せねえからと思って万事屋へ来てみたのだが

「土方、もうホント好き。好き好き好き好き」

俺にべつたりくつついで離れない銀時。

「うるせえー・セシヘヘツヘナー。」

煙草もろくに吸えねえ状況について怒鳴つたら

「十四郎のけちー」

口を尖らせ不満をつ。

「つたく…ビうじたんだよ

普段から好き好き言つてしまつるが、ここまでヒドイのは始めてだ。

すると銀時は

「だつて今日は大晦日じやん。じゃあ今日好きつて言つとかねえと
今年はもう言えないとんだけ?」

「やつと笑つて得意気に言つ銀時に

「ひー」

俺は何も返せ

悔しいが

『チクシコウ、愛されるのがこんなに嬉しいなんてつ……』

とか思つてしまつ。

来年もまた、一人でいれますよつこ

「来年はまつと遊ぶからね、十四郎」

「お、艦長さんだ！」

- 薔薇 -

人は時として

危険と知りつつも

回避出来ない事がある。

何故ならば、危険な物は往々にして美しく魅力的であるからで。

例えば今、目の前に居る男の様な。

今からうしごに来ない？

その男は言った。

行つてはイケナイ

頭の中で響く警告も、時既に遅し。

俺はもう

その紅い瞳に射抜かれ

低い声に犯され

身も心も墮ちていた。

差し出されたその手を握れば

俺はお前に溺れてしまつ。

傷付けられ

引き裂かれ

墮ちてしまつ。

刺さつた棘は甘く身体を駆け巡り

それはむしろ甘やかな痛みで。

お前の毒に犯された俺にもう逃げ場は無い。

俺は、差し出されたその手を握つた。

・黒空テイト・

「星キレイだなあ」

居酒屋からの帰り道。

銀時が夜空を見上げて言ひ。

「そうだな」

今日は新年会と称して二人で飲んだ。

二人共、ほろ酔いで千鳥足。

「ほひ、ちゃんと前見ねえと転ぶぞ」

「はいはい」

そつ事をするものの、空を見上げたまま歩く銀時。

「つまつ

ほり言わん」「ちちない。

よりめく銀時。

「つぶねー

焦つた様に呴く銀時に

「まひ

手を差し出す。

「？」

よく理解していないようだから、無理矢理手を掴む。

「ホント世話の焼けるヤツだ

「ひつ、土方？」

驚く銀時を無視して指を絡め、隊服のポケットに突っ込み

「うひじてや転ばないだう？」

「ヤリと笑つてやれば

「つ。」

案の定真っ赤になる銀時。

俺が歩き出せば、手を握られたまま付いてくる。

ホント可愛いいつたらねえよ。

「ねえ、土方」

「ん？」

手を握られ、黙つて付いて来ていた銀時が急に立ち止まる。

「来年も一緒に、新年会しような

俯いて、でも繋いだ指に力を込めて俺に呟づ。

「…おう、もちろんだ

ポケットの中で握り返して、

指を深く絡め合つ

二人で顔を見合させ、笑つた。

・居眠り姫・

昼下がりの真選組屯所で、
皆が忙しく働いている中で、

炬燵で寝ている男が一人。

「あ、もう旦那つてば… そんな所で寝てたら風邪引きますよ」

そう、万事屋主人 坂田銀時である。

通り掛かった山崎が声を掛けるも

「んー…」

完全に寝ている様子。

何故、銀時が屯所に居るのかといつと、

万事屋の節電の為

だそうで。

まあ実際の所、

仕事が無くてお金も無くて暇だから

が理由ではないか、と山崎は考えている。

「ちょっと田那、風邪引きますつてば

横に座り込んで肩を叩くも返事は無し。

柔らかい銀髪がふわふわ揺れるだけ。

「まったくこの人は……」

溜め息混じりにさつ眩いて、寝顔を見詰める。

『ほつぺた柔らかそつだなあ。唇も……』

山崎は不意にそんな事を考えてしまい、一人で焦る。

『田|那|に|と|き|め|く|な|ん|て|そ|ん|な|…』

でもこの胸の高鳴りは事実なワケだ。

あくねあくねと回つを窺つと

『…誰も居ない』

なりばと意を決し、恐る恐る手を伸ばす。

かなり緊張しているのか、震えている指先。

シン、とせつべたをつつかば、ふにやつとした感触。

『や、柔らか…』

山崎は再び回つを窺つ。

『いみんなさい田|那|、後もつ一回だけ…』

心中で謝りながら、再び手を伸ばす。

『次は匂に…』

後少しだけ触られる。

その時

「おー山崎、何してやがんでー」

急に後ろから声を掛けられ、飛び上がらんばかりに驚く。

恐る恐る振り向けば

「たつ隊長つー..」

真選組一番隊隊長、沖田総吾の姿が。

「何サボつてやがんでー」

冷や汗だらだらの山崎。

沖田はガムを噛みながらアイマスク装着で、今正しくサボり中な
だが。

「すみませんでしたあー！」

ダッシュで逃げる山崎の背中を見遣り

「何だつてんだい…」

山崎が何かしてた場所を見る。

「あ、旦那」

山崎のヤロー、旦那に向してたんでい

そんな事を思いながら、銀時の横に座る。

『旦那の髪、ふわふわでさあ』

銀時は気持ち良さうに黙っている。

『万事屋の節電なんて言つて…土方コノヤローが旦那を傍に置いと
きたいだけじやねえか』

そつ思つと句だかムカついてきて、

ふわふわの髪に触れた。

『… やあらかー』

次は一房摘まんで香りを嗅べ。

『甘ー…』

ふわふわ触りまくると辺りに甘い香りが漂つ。

『いい匂いであります…』

「ん…」

触りすぎたのか、銀時が身動きした。

ドキリと鳴る胸。

しかしあた眠ってしまった様で。

『あーあ、こんな無防備な顔しちゃって、可愛いつたりあつやしねえ』

このまま銀時の髪を触りながら、自分も昏睡しようと思つたその時

凄まじい殺氣と共に、地の底から響くよつた声。

「ちつ、見付かっちゃった」

そこには既に抜刀済みの鬼の姿が

「お前さ！ 録時に何してやがる？！」

ホント井戸さんは姫嫁深くついにねえや」

「なんだともー。」

今にも斬りかからんばかりの土方。

『曰那を触りまくるのはまた今度にしませあ』

面倒が嫌いな総吾はヒラリと土方の脇をすり抜け、何處ぞやへ消えた。

「うう……油断も隙もあつやしねえ」

刀を鞘へ戻し、舌打ちする。

そして銀時の横に腰を下ろし柔らかい髪を撫で口付けを落とし、

『まあこんなに口づけつけようがねえか…』

銀時が起きるまで、悪い虫が付かないように見張つてゐるのだった。

- 恋文通信 -

もうすぐ日付が変わる夜更け。

1日の仕事を終えた土方十四郎は、漸く自室に戻つて來た。

隊服を脱ぎ、スカーフを緩め煙草に火を付ける。

ふう、と煙を吐き出した時

「何だ？」

何かに気が付いた。

窓に何かが挟まつてゐる。

朝はそんな物無かつたはずなのに

不思議に思い、手に取り見てみると

「…手紙、か

真っ白な封筒に手紙が一枚。

中を開けば

『好きだ』

と、一言だけ。

封筒を見ても、宛名も名前も書いていない。

「ラブレターってヤツか？」

しかしまず第一に、誰からかが解らない。

「…どうしたものか」

暫く考え込み、筆を取つた。

「これしか無いもんな」

次の日、土方が部屋に戻ると

「無くなつてやがる……」

実は昨日、土方は返事を書き、窓に挟んでいた。

まあ返事と書つても内容は

『名前くらい書いとけ』

だけなのだが。

ひょつとして、また書いたヤツが来るんじやないかと思つて挟んだ
のだが

「まさかホントに来るとはな」

何だか妙に可笑しくなり、その誰かも解らぬいヤツに親しみが沸いてきて。

少し笑つて、暫く窓を眺めるのだった。

次の日、案の定窓に手紙が挟まっていた。

中には

『名前は言えねえ』

・言えない、

つまり自分の知り合いの可能性が高いワケか。

土方はまた少し考え、筆を取るのだった。

次の日もその次の日も、手紙のやり取りは続いた。

毎日続くそのやり取りは、何時しか多忙な土方の癒しの一時となっていた。

『今日パチンコで勝つた

『犬の散歩に行つた』

『団子が皿かつた』

そんな一言口記みたいな内容の手紙。

それに土方は短い返事を書いた。

そんなやり取りが一週間ばかり続いたある日。

土方は1ヶ月ぶりのオフを貰つた。

する事もないし、1日寝て過ごすか…

いや、まじょ…

オフの日、土方は一日部屋で過ごした。

何をするでも無く、しきりに窓の手紙を気にしながら。

もう口が暮れてきた頃

ザツザツ

足音が聞こえてきた。

土方は素早く窓の傍に移動し、身を隠す。

足音は部屋の前で止まり、

手紙が抜かれた瞬間、

土方は窓を開けた。

「ぎやっ」

声を上げたのは、

土方の良く知る人物。

万事屋だった。

咄嗟に腕を掴み、逃げられないよつてある。

「…お前だったのか

なるほどな

土方が声を掛ければ、俯く万事屋。

「綺麗なねーちゃんじゃなくて悪かったな

拗ねた様にそっぽを向く。

「でも、ばれちやつたし、これで文通ゴシコは終いだな

少し笑つて言つて万事屋に

「ああ、やつだな」

と返す。

「じゃ、帰るから

土方は腕を掴んだまま。

「ちよ、離してくんない?」

腕は離れず、話し掛ける。

「なあ、万事屋」

「何だよ」

「お前、文通だけの関係で満足か?」

「なつ、何を言つてんだ」

赤くなる万事屋の腕を引き寄せ

「ちよつー? 土方?」

抱き締めた。

「俺は文通なんかじゃ足りねえよ」

耳元で言えば、びくりと震えるカラダ。

「だつて…俺みたいなダメなオッサン、土方もイヤだろ?」

腕の中から逃れようともがく万事屋を、もつと強く抱き締める。

「俺はイヤじゃない」

そう言えれば急に大人しくなり

「…期待しちまうぞ」

ぽつりと呟く万事屋に

「ああ、存分に期待してくれ」

得意氣に返し、赤く染まる頬に口付けを落とした。

・雨恋・

今日は朝から雨。

ずっと部屋に籠つさりで事務作業をしていたから、気分転換に煙草を買いに出た。

傘をさして歩き、自販機で煙草を買い、何だかそのまま屯所へ戻る気には慣れず

「散歩でもするか」

屯所とは逆へと歩き出した。

周りは雨のせいか、人が少ない。

傘に降る雨音を聞きながら、買ったばかりの煙草に火を付ける。

深く吸い込めば、雨でしつとつとした煙が肺を満たした。

「しかし良くなれるな」

誰にともなく独り言がでる。

「わらわらと、あても無く散歩していくと、

「…アイツみたいだな」

何時もふらふらへりへりしていのアイツ。

ああ、思い出したら頬が緩んでくる。
ふるふると首を振り、頬を引き締め、

『仕事中なのにこんな事じゃいけねえな』

部屋に溜まつた書類の山を思い出し、屯所へ足を向いた。

屯所へ戻る途中、橋の上。

俺は足を止めた。

先には、橋に寄りかかり傘もささずに佇んでるヤツが。

白い着流しはしつと身體に張り付き、髪からは滴る滴。

冷えきつていののか肌は普段よつと白べ、このまま翻て演えて仕舞い
そつな夢さ。

あまりの美しさに細わず息を呑んだ。

暫く見詰めていたが、どうやら回り込みに気がついて無いつ。

俺は足を進め、傘をわじてやる。

「どうしたんだ

声を掛ければはつと俺を見て

「土方…」

小さく呟いた。

濡れた頬が透き通るよつだ。

「向でもねえよ

俯いて何時も調子で言ひ口いつこムカついて、

思わず白い頬を包み、口付けた。

手から滑り落ちる傘。

降る雨は俺と「マイツ」を濡らしつづけ

「どうしたの、土方…」

白い息が空へ昇る。

抱き締める身体は冷たく凍え、少しでも暖まる様にしつづけ抱き締めた。

「お前」ハジラウしたんだ

問い合わせれば

「雨の日は何だか寂しくなっちゃわない?此処に居れば誰か来るんじゃないかと思つて…」

珍しく素直に答える「マイツ」。

しかしこの橋の先には屯所しか無い。

通るのは真選組の人間だけだ。

「来たのが俺で、満足か?」

聞えれば少し笑つて

「まあ不満は無いかな」

と深く胸に潜り込んでいた。

「でもどうしたの土方くん。今日はヤケに優しいね」

胸の中からからかう様な声。

「お前もヤケに素直じゃねえか」

それにニヤリと笑つて言ひ返し、

見詰め合ひ、どちらともなくまた口付けて

「せりや雨も降るつてもんだ」

一人で笑つた。

賭けの勝者

- 賭けの勝者 -

土方とは、一回寝ただけだ。

別に土方がハジメテだつた訳じゃないけど、忘れられない。

誘ってきたのは土方。

俺は土方が好きだったから、頷いた。

その後は何もない。

それ以来、前みたいに喧嘩する「とも罵り合つ」とも無くなつた。

ホントに何もない関係。

あの日以来、俺の土方への想いは膨らむ一方で。

でも土方は町で会つても、田も会わせてくれない。

まあ、土方からしたらあの日の事は何かの氣の迷いだつたのだろうけど

こんな気持ち抱えて暮らしていくのは、正直キツイ。

ある日

「まだ俺と付き合つ気にはなりませんか？」

前に依頼を受けた男と町で会つた。

依頼を受けて以来、俺にまとわりついてくる。

「なんねえよ」

何時もみたいに素つ氣なく返すと、

「あ……」

前から土方が。

丁度いい。

そろそろ踏ん切り付けたかったから。

俺はちょっとした賭けに出た。

「……いいぜ、付き合つても」

「ホントですか！」

俺の手を握る、元依頼人。

少しでも俺の事を想うなら、何等かの反応があるはず。

その瞬間、土方が俺の横を通り過ぎた。

何時も通り

声を掛ける事も、見る事もせず。

わざと『テカイ声で会話してたから聞こえてるはず。

でも反応無しって事は

『つまり…そういう事か』

やつぱりと言えばやつぱりなんだが。

自分で仕掛けといて傷付くなんて情けねえな。

横の元依頼人は俺の手を握り、歩き出す。

ぼんやり付いて行く俺。

何か話してるけど、全然耳に入らない。

ふと気付けば、人気の無い路地裏に連れ込まれていた。

あつ、と思う間も無く壁に押し付けられる身体。

迫る顔。

自分が仕掛けたんだ。

じょうがない。

でも…

「土方あ…」

思わず口を付いて出た名前。

ああ、涙まで出しきりやつたよ。

「ひじ…かたあ」

もつ無理だ。

ギュッと皿を握ると

「呼んだか？」

不意に、声がした。

見れば息を切らす土方の姿。

追い掛けで来たの？

土方が？

何で？

混乱する俺を土方は素早く引き寄せ、腕の中に収める。

そして

「何してんだバカ」

そう言つて抱き締めてくれた。

堪えてた涙は溢れだし

「だつて、土方の事忘れようと思つて……」

押さえてた想いも溢れだし。

「だつて土方、俺の事、嫌いなんだろ？」

だから、だから……

土方は、涙で言葉が続かない俺を抱き締めたまま

「俺がいつ嫌いなんて言ったか？」

そして

「覚えとけ。俺は好きなヤツしか抱かねえよ」

そつとキスをくれた。

「でも、俺の事避けてたじやん」

混乱したままの頭は土方の言葉も上手く理解出来ない。

「つまり俺の事、好きなの？嫌いなの？」

俺の問い掛けに土方は溜め息を付く、

「お前の事避けてたのは…顔見ちまうと、また抱きたくなるからだ。本当は想いを伝えてからと思ってたのに、先に手え出しちまつてすまねえ」

好きだ、銀時

耳元で囁かれ、また霞む視界。

「俺も好きだ、土方あ……」

やつぱ賭けてみて正解。

俺は土方に思いっきり抱き付いた。

「あの……俺は……？」

「「あ、もう帰つていいよ」」

子は鎌

・子は鎌 -

土方は動搖していた。

かぶき町の橋の下で。

目の前には籠。

土方の手には、籠に入っていた手紙。

『もう疲れました。どなたかこの子をお願いします

視線の先には、籠に入つて無邪気に笑う赤子。

「どうー」

「……」

赤子は土方に手を伸ばすが、土方は動かない。

否、動けない。

何故なら

『何この赤子！銀色なんスけど！ものつそい銀髪なんスけど！－！』
んな髪してるヤツは…』

「銀時ぐらいじやねえかバツカヤ口オオ！！！」

アイツ……！

浮氣しやがつたな……！

そして孕ませてトンズラしたつてワケだな。
…………

ホント最悪じやねえかあのバカつ！

俺は赤子を抱き抱え、万事屋へと全力疾走した。

スパン、と勢い良く万事屋の扉を開くと

「那儿也有一个十四岁的小孩——」

今、まさに団子を頬張るうとしていた銀時が、驚きの悲鳴を上げた。

「てめつ！ 何なんだこれは！」

「一」

未だ驚いたままの銀時に赤子を見せる。

すると暫く俺と赤子を交互に見比べ、涙目になる銀時。

「…何だよ」

「十四郎がつ、俺の子を産んでくれたあああ！」

本気で感動している。

バカか？やつぱバカなの？

「「」の腐れ天パああーお前俺の性別知つてんのか！？」

全力で罵るが

「十四郎…、俺の子を産んでくれてありがとうー！」

涙目で優しく赤子ごと抱き締められ、何だかドキリとする。

変に暖かい銀時の胸。

腕の中にやすやすや眠る赤子。

.....

いやいや、違うぞおー！

何この感動的な感じ！

俺産んでないからね！？

「つむかお前の浮氣の産物だらつがああー！」

抱き付く銀時を引き剥がし、思いつきつぶん殴る。

「へほしごつー！」

すつ転がる銀時。

頬を押されて

「だ、だつて……」

「言ひ訳しよひつかあ？」

「その田付きの悪や、十四頭にそつくりだし、髪は俺にそつくりだから、何かの間違いで……産まれちゃつたのかな、的な……」

「はあ？」

言われて赤子をよくよく見てみると

……確かに、俺に似てこる感じがしないでも無い。

「ね？ね？それに俺浮氣してねえしね？俺はお前以外は抱けないからね？」

確かに、俺と銀時を足して2で割つたらこんな顔だろう。

「…ホントに浮氣してねえんだな？」

「ホントだつて。俺は十四郎だけだから

そつまう銀時の田は真剣だ。

じゅうがねえ

信じてやるか。

「…解つた。じゅあいの子の親を探さねえとな。あ面倒は山崎にて見せるか

俺がそつまうと

「見付かるまで一入で育てたらよくな？」

万事屋でさ

「ヤリと笑つて、銀時は提案した。

： それから俺は万事屋に住み込んでいる。

仕事にはどうしても行かなければならぬ時だけ行く。

いつの間にか銀時が勝手に十五郎と名前を付けていた。

毎日十五郎の世話だ。

ミルクにおむつ、風呂に飯。

初めてで手慣れない 僕を、銀時が意外な器用さでフォローする。

何だか悔しいから絶対言わねえが

『…いい旦那だ』

何て思つたりもする。

それから一週間ばかり経つただろうか。

漸く子育てに慣れてきた頃

ピンポーン

万事屋の呼び鈴がなつた。

「もうあんな真似すんじゃねえぞ

「ありがとうございました」

深々と頭を下げる歩いて行く女。

その腕の中には、十五郎。

：呼び鈴は依頼人だつた。

赤ちゃんを探して欲しい、と。

「まあ、母親が一番だからなあ」

抱かれて行く十五郎の笑顔を見て呴く銀時は、何時もと変わらない顔で、

でも何処と無く寂しそうで。

「まあ、そうだらうな

俺も腕の中が何だか寂しくて。

銀時の手を握つて、ずっと見送つた。

「ねえ、ホントに産んでくれない?」

「バカか」

朝の日課

-朝の日課-

-銀時サイド

朝の6時

もう飲み屋も閉まり、かぶき町が一番静かな時間帯。

俺は窓を開け、通りを眺めている。

大きく欠伸をすれば、息が白く空へ昇った。

… そろそろ来るかな

耳を澄ませば、遠くから足音がする。

あ、来た。

胴着を着て、息を切らし走る土方。

俺はこの土方を見るのが好きだ。

前にたまたま早起きした時に見掛けた姿。

冬の寒い朝に、首筋に光る汗と白い息がとても綺麗だった。

視線は鋭く何ともストイックな感じで。

ドキドキして、目が離せなかつた。

それ以来、出来る限り早起きしてじつぞり眺めている。

まあ、俺の朝の日課つてやつだ。

土方が万事屋の前に差し掛かる。

『ああ、今日は綺麗だ』

・土方サイド

静かなかぶき町に俺の足音が響く。

いつかって走るのは俺の口課だ。

朝の澄んだ空氣で身も心も引き締まる気がして。

それに思わず楽しみも見付けたしな。

『…もつすべ万事屋だな』

思えばふつと笑みが溢れる。

『アイツ、今日は起きてんのかな』

アイツは何時も少し隠れる様にして、通りを見ている。

『…あれで隠れてるつもつなのか?』

その窓から見え隠れする銀髪。

だんだん万事屋が近づく。

素直にそう思った。

『綺麗だ…』

銀髪が朝日を受けてキラキラ輝いて

田をやれば、アイツが窓を開けてぼんやりしている。

万事屋の窓からだ。

ある日、走っていると何かが光った。

いや、多分俺を。

まあ奥ゆかしいこと言つたか何と言つたか。

もつすべ万事屋の前だ。

『ちよつとイジワルしてやるか

何で急に思い立ち、

俺は万事屋を通り過ぎる時、

窓を見上げ、じつやう見ているアイツと田を合図させてニヤリと笑つてやつた。

隠れてるつもりだらうが残念だったな。

俺の方が一枚上手なんだよ。

まるでそう言わんばかりに。

- 銀時サイド

万事屋の前を通る土方は、俺を見てニヤリと笑った。

「へつ！」

急な展開に思わず隠れてしまつ俺。

バレてた？

何時から？

ヤバイ恥ずかしいつ！

急に熱くなる顔。

だけどあんな得意気な顔で笑われたら…

「…何かムカつく」

チクショウ、明日は一いつから手を振つてやる。

そう想い、俺はまた布団へ潜り込んだ。

俺様彼氏

-俺様彼氏-

デカイ仕事が片付き、一人で呑んだ帰り道

「ん……？」

ふらふらと千鳥足で歩く女を見付けた。

こんな夜中に一人で危ねえなあ

そんな事を思いながら眺めていたら、目が合つた。

途端に逃げ出す女。

なんだよそりゃ

何だか腹が立ち、覚束無い足で逃げようとする女の腕を掴み

「何だ？俺の知り合いか？」

嫌がる顔を無理矢理掴み覗き込めば

：知ってる何でモンじゃねえよ

「ちつ、」

盛大に舌打ちする田の前の女。

いや、男か。

あの後、嫌がる女を引き摺るように近所の料亭に入った。

しかし…

「まさかお前とはなあ」

万事屋

からかう様に言えばまた舌打ちして、付け毛を奪取る。

「悪いかよ。ってか何で俺こんな所に連れて来られてんの？」

不貞腐れた顔で、綺麗に飾られている帯を緩め

「あー、女モンはキツくていけねえや」

大きく伸びをした。

「……お前じで何でそんな格好してんだ」

そりは出された胸元に田線をやらぬよつ氣を付けながら問えば

「んー、バイトかなあ」

片膝を立て、酒を煽りながら答える。

「バイト? ああ、あの化け物屋敷か」

「そ、今月万事屋の依頼が少なくてねー」

つて事は、「イイツはあの格好で今まで男達にお酌していた訳か。

…ん? 何だこの胸の苛立ちは。

「あれ? 土方くん飲まないの?」

急に黙り込んだ俺に、万事屋が酒を差し出す。

二人きりの個室

向かい合って座る万事屋

淡く紅を引いた顔は薄暗い照明のせいか妙に艶かしく。

緩め乱れた着物から白い太股が覗いて、溢れ出す色氣に当たられくらぐらした。

「お前、…仕事中まさかそんな霰もない格好でお酌とかしてねえだろつなあ」

俺の視線に気が付いたのか、慌てて着物を直す万事屋。

「つーそんなの土方には関係ないじゃん」

…そうだ、

確かにコイツが何をしようつと俺には関係無い筈だ。

だけど、こんな綺麗なコイツを他の男には見せたくない。

「の気持ち……まるで嫉妬だな。

「ああ、成る程。

「の気持ちはそういう訳か。

「……関係無くねえよ

「低く返せば、顔を赤らめ

「な、何だそれ。お前が俺の彼氏って言つなら解るけど……

自分で言つておきながら、まつとして俯く万事屋。

見れば耳まで真っ赤に染まっている。

「彼氏じゃねえよ

彼氏？

いや、そんなもんじゃ俺は納得しねえ。

「じゃあ…関係ないじゃん

潤む瞳で俺を睨む万事屋。

バカか。

そんな顔したって可愛いだけなんだよ。

そんな事を思い、ふつと笑うと

「なつ、何だよ」

更に睨まれ。

そんな万事屋の手を無理矢理掴み

「バカか。俺はお前の、彼氏様だ」

様を強調して耳に低く囁き込めば

「へつ！」

目を丸くして驚く。

「不満か？じゃあ王子様でもいいだ？」

更に奥んでいる手の甲に口付ければ。

「かつ勝手にすれば？」

強がる様が可愛くて、俺は熱い万事屋の頬に口付けた。

「じゃあもうあの店でバイトすんじゃねえぞ」
「じゃあ毎日援助してよ、彼氏さ・ま

人の話は最後まで

- 人の話は最後まで -

法律とかそういうた事は完全無視です。

銀時に呼び出された。

何時もの居酒屋。

大事な話があるとか何とかで。

一体何だ?

「親父、生二つ」

俺の前に座る銀時は、心なしかソワソワしている。

…まあコイツが落ち着き無いのは何時もの事なんだが。

チラチラ俺の方を窺う銀時。

何だよ 一体。

「で…、何だ？話つて

悩むより聞いた方が早い。

そう思い、切り出した時

『まさか…別れ話とか

氣付いてしまった俺。

だつてそうじやね？

大体このパターンってそうじやねえ？

やべえ、切り出さなきゃ良かった。

内心焦りまくつてゐるが、顔に出さないよつ心掛けた。

「んー、話しつて言つつか…」

歯切れ悪い！

もう絶対そうだ。

何故だ？

あれ？俺何かした？

「実はさ、十四郎…」

「ちよおおおつと待った！」

俺の声に驚いて言葉が止まる銀時。

「す、すまねえ…、こっちにも心の準備つてもんが…」

「あ、ああ、だよねー」

準備つて！

自分で言つて何だが

んなモン出来る訳ねええ！

やつぱり俺、銀時が好きなんだ。

こうなつて始めて解る。

今まで自分なりに大事にしてきたつもりだったが、全部一人よがりだったのかもなあ……。

そうだな……

やつぱり俺はコイツを失いたくねえよ。

今解つた。

俺は、銀時じやないとダメだ。

「も、いい？」

銀時の問いに無言で頷く。

コイツが何て言つても絶対別れねえよ。

銀時は深く深呼吸をして、口を開く。

「じ、実はさ、十四郎……。俺と、その一、何だ……けつ……」

「せってえイヤだ！」

「結婚して……、え……？」

「え……？」

「何つった？」

「今コイツ何つった？」

「そして俺何つった？」

「あーもう一銀さん一世一代の大決心のプロポーズだつたんだけ
どお」

あれから気まずい空気のまま、居酒屋を後にした俺達。

「……すまねえ」

もう一度謝ると、立ち止まる銀時。

「いやーねえな。じゅかー回やつ直しな

驚いて振り返ると

「結婚しよう、十四郎」

見た事無い程真面目な顔の銀時が。

お前： その顔反則だ。

撃ち抜かれちまつたじやねえか。

「おひへ、貰われてやう

見惚れてるのを気付かれない様に俯いて答える俺に、銀時は一ヤリと笑い

「じゃあ十四郎は今から俺のモノね

懐から何かを取り出し、俺の手を取る。

「…ありがとね、十四郎

指にヒヤリとした感触。

指輪だ…。

ああ、陳腐だとは思つがこんな言葉しか出でへんねえよ。

「…幸せにしねえと呶つ斬るからな

その面葉に銀時は満足そつに領き、

俺達は指を絡め家路に着いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5161z/>

罪深く悩み多き我等

2012年1月13日20時56分発行